

■ 論文Ⅲ ■

時枝誠記はソシユールを「誤読」したか？

——日本のソシユール受容史における小林英夫の役割についての序論

本学東洋思想研究所嘱託研究員 関 沢 和 泉

I 序

表題の問いについて、私達はただちに、語の厳密な意味においては、そして幾つかの点については、確かに誤読である、と答えなければならないであろう。

だが、同時に、時枝誠記の「誤読」は、日本語において〈ことば〉を巡る語彙がどのように機能しているのか、そしてそれはフランス語において表現されているソシユールの〈ことば〉をめぐる議論が、果たして何を行っているものなのか、それはどれだけ普遍的なものであるのかといった問題についての考察を行うための有益なヒントを与えてくれるものでもある、と付け加えなければならない。

そして、また、そうした時枝の「誤読」の背景に、ソシユールの『一般言語学講義』の邦訳者である言語学者・小林英夫の翻訳のまずさといった問題があるとしばしば指摘され

るのだが、実の所、単なるソシユールの（あまり適切ではない）紹介者などと言われる小林は、そうした「紹介者」に留まらず、独自の形で、ソシユールの著作が行われたフランス語の論理と、彼がそれを翻訳した日本語の論理の違いの分析をしており、その構図の上にこそ、時枝の批判は、その構図の転倒として成立したと考えられるのである。本稿で検証するのは、この転倒の様子である。

さて、このように、小林英夫は、単なる海外の言語学の潮流の紹介者に留まらない、極めて重要な役割を担っていると考えられるのだが、紹介者としての小林ではなく、彼自身の言語理論については、残念ながら、ほとんどまったく分析がなされずにきた。例外は、独自の国語改革論者として、小林が自身の言語観を練り上げてきた過程を分析し

た立川（一九九四―一九九五）であり（渡辺（二〇一〇）、六〇頁、註三）、また、それを指摘する渡辺自身の分析である。そこで、本稿では、しばしば日本の言語思想の伝統に繋がる側面ばかりが強調される時枝のソシユール批判の背景にあったと思われる小林の提示した構図が果たしてどのようなものであったかを確認することで、なぜ時枝の「誤読」は単なる誤解であると済ませるわけにはいかないのか、を確認し、今後の小林英夫自身の言語理論の研究——そしてそれは、時枝の議論の位置づけの再評価へも繋がるだろう——への導入を企図するものである。

なお「言語活動」という言葉を鍵にして、より具体的な「『国語』教育」の場面においてこうした問題を分析した上述の渡辺哲男『『国語』教育の思想』（二〇一〇）は、小林の位置付けについて、本稿で扱う極めて細部の問題とは異なった主題を扱いつつ大きな見取り図を与えており、日本においてはまだまだ発展途上だと言える言語学史研究の極めて優れた労作といえるものであり、本稿もその影響下にある事を記しておきたい（なお以下、本編中の引用は、必要な場合、基本的にすべて現代仮名遣いに改めてある）。

II 時枝誠記の現在

時枝誠記の日本語を軸とした言語の分析については、以

前から、哲学的な観点からの関心・評価が高かったことは良く知られる事実である。古典的な所では、例えば、三浦つとむが挙げられるだろう。彼は、時枝の、言語は何よりも、個別の具体的な言語の規則・規範にあるのではなく、表現と理解の過程にあるとした「言語過程説」を高く評価した。とはいえ、三浦は、時枝のソシユール批判と言語過程説について、「（時枝は）正しい規範論を持たなかったために、ソシユール理論を正しくつくりかえるまでに至らなかった」と評するのであり（三浦（一九八三）、四三一頁）、表現（ないし交通＝コミュニケーション）における規範・形式の重要性・不可欠性を考慮に入れ、そうした欠点を補いつつ言語過程説を理論的に再整備しようと試みた上での評価ではあったのだが（小川（二〇〇四）参照）。

あるいは例えば中村雄二郎（一九七二―一九九三）（一九八三・一九八七―一九九三）に見られるような、西田哲学の再評価と連動させての時枝評価も存在する。一連の著作で、中村は、時枝のソシユール批判は、おそらく邦訳の問題に由来するにせよ、ソシユールの用語法をまるく理解していない決定的な誤読によるものであると完全に切って捨てつつも、西田幾多郎の「場所の論理」と日本語の構造の驚くべき近さを示してくれるものとして評価するのである。

ただし、このように、西田哲学と時枝の言語理論とがど

のような関係にあるかについて判断するには、ある程度慎重になる必要があるだろう。例えば、柄谷（一九八三＝一九九九＝二〇〇四）は、こうした類似性は、そもそも時枝誠記が西田哲学の影響下にいたから生じたのであり、このような見方は転倒していると指摘する。

だが、それでも直接的な影響関係を証明するのは現状では困難であり（安田（二〇〇六）、一〇七頁）、柄谷が言うような形で西田（学派）との関係を自明であると言って済ますだけでなく、むしろ西田自身ではなく、西田周辺の人々が書いた科学哲学的な書物への、時枝に留まらない周辺の言語学者も含めた言及について、「哲学的」影響というよりも、より限定された「科学哲学的」影響の観点（それらのテキストにおいては人文科学も含めた諸科学の性格付けが論じられており、時枝等が、どのように言語学の科学＝学門としての可能性を考えたかの影響関係を追うことが出来る）から、より具体的な分析を行う必要があるように思われる。

他方で、西田幾多郎と京都学派の政治的な役割についての評価と同様に、彼の言語理論が、その発言された文脈において含み持つ政治的な側面については、すでに戦後すぐから批判が続いてきたのであり、近年では「国語」と「日本語」をめぐる政治的コンテキストを分析し続けてき

た安田敏郎の——とりわけ『植民地のなかの「国語学」』（一九九八）——子安宣邦（一九九四＝一九九六＝二〇〇三）が、そうした問題を追っている。

さて、以上のような一方で、哲学的関心からの肯定的評価と、その当時のコンテキストにおける政治的な機能からの批判的分析があるとして、その政治的なコンテキストなどを取りあえず括弧に入れた上での、時枝誠記の言語理論自体は、現在、言語学の分野からどのように評価されているのか。

そこには、ある種の分裂とでも言うべきものがある。つまり、一方において、とりわけモダリティ研究の先駆者として肯定的に評価される一方で、やや言語学史的な話題になるのだが、彼のソーシャル批判については、例外的なケースをのぞき、先に中村雄二郎の時枝評価に見たのと同様に、フランス語の理解・翻訳の問題などに起因するある種の誤読として片付けられてしまい、もはや顧みられない事が多いのである。

まず、肯定的評価の方を見てみよう。

例えば「モダリティについての研究は、この十年の間に、言語学において最も活動的な研究分野の一つとなった」（美

際、数多くの研究論文・研究書が近年出版されている——ただし、日本ではこのモダリテイ研究は、さらに早い時期から盛んである」というモダリテイ研究の現状についての総括から始まるNarrog (二〇一一)において、日本語の例は、英語とドイツ語に並んで、決定的に重要な位置を占めている。彼は確かに、ドイツ出身の日本語学研究者なのだが、モダリテイ研究において、日本語が重要な位置を占めているのは偶然ではない。

詳細に踏み込むと論者による定義の違いなど扱うべき問題点は多いため本稿では触れないが、「モダリテイ」というのは、話し手が発話する際の心的な態度を言うものである。一方に外的世界や内的世界の「事態・対象的な内容」(命題)があり、他方に、それをどう受け取っているか、そしてどう伝えるかという話し手の態度(モダリテイ)がある(仁田・益岡(二〇〇〇))。例えば英語であれば、*must*や*may*といった法助動詞で表される事態を想像するのが早いだろう。日本語では、しばしばそれは日本語にとって重要な末尾において、高度に文法化された形で明示される(益岡(一九九一)、三〇頁)。そうした事柄の分析から、また、日本語は「感情や思考の表現において、判断主体の主観性に属する事柄を客観的事柄から区別して扱」い、「当該の事態に対する判断主体の関わりを明示する傾向が強い」と

言うことも出来るだろう(同所)。

ところで、これは、まさに時枝が日本語について分析した際に、話者(時枝の記述では主に主体と言い換えられる)の重要性を強調し、「辞」といわれる機能語が、後から、先行する「客観的事実」を示す「詞」を包み込むと分析したことに対応している。

実際、例えば、先のNarrogは、日本語のモダリテイ研究に特化したNarrog (二〇〇九)において、日本におけるモダリテイ研究史を振り返っているが、その中で時枝誠記は、ある種の前史としてではあるが、やはり重要な位置を占めている(同書二一—三三頁。ここで追記しておくべきは時枝的なアプローチを避けつつ言語における主体性を研究しようとした日本の研究者にとって、シャルル・バイイが非常に重要な役割を果たした事が述べられている点である)。同様に、日本語におけるモダリテイ研究において、時枝が理論的な経緯においても、関連する言語資料の提示においても重要な位置を占めていることについては、例えばMaynard (一九九三)やJohnson (二〇〇三)も参照することができる。また、例えば池原(二〇〇四)は、時枝の言語理論を継承した三浦つとむの言語理論との出会いと対話が、彼のコンピュータ上での自然言語処理研究の進展にとって非常に重要な役割を果たした事を述懐している。

このように、時枝の言語理論は、狭義の言語学内部において、モダリテイ研究を中心にしながらも、単に日本語研究に留まらない形で、ある種の源流にあるものとして評価され読まれ続けているのである。

だが、しかし、日本におけるソシユール受容の歴史から見た場合、どうなのか。こちらの事情は、後述のように、ソシユール自身のテキストの問題があり、少々入り組んでいる。だが、総体としては、ソシユールの誤読に基づくものとしてあまり真剣には検討されないか、あるいは一九五〇年代以降次々と発掘されたソシユールの新資料に基づき、当時時枝が目の前にしていたソシユールは、そもそも「本場のソシユール」ではなかったのであり、つまり時枝が批判していたソシユールは本来のソシユールではなく、時枝自身の立場は、実は真のソシユールなるもの立場と決してそれほど遠くなかった、と問題が解消される事が一般的であるように思われる。

確かに早くからその重要性を指摘している前田英樹（とりわけ前田（二〇〇七））のように、時枝によるソシユール批判を、ソシユールの言語学の限界を的確に指摘したものであるとする論者もいる。だが、恐らく、時枝の言語理論自体は評価するにしても、そのソシユール批判についての

評価としては、日本のソシユール受容史に新たな段階をもたらした丸山圭三郎が編集した『ソシユール小事典』に寄せられている前田・滝口（一九八五）による、日本におけるソシユール受容史をまとめた文章が示している線に近いものが一般的だろう。これに依拠しつつ、若干違った観点も含んでいるSuenaga（二〇〇三）、また昭和初期の受容について、さらに細かく扱っている石井（二〇〇七）と合わせ、本稿の読者には必ずしも知られていないであろうソシユールの受容史を振り返りながら、簡単にその評価を確認しておきたい。彼らによれば、日本でのソシユールの受容は三段階、あるいは四段階（Suenaga）に分けられると言う。Suenaga（二〇〇三）は、前田・滝口（一九八五）後の状況も扱っているため、四段階に区分するのが、現在から見た場合適切だと思われる。ただし、それぞれの段階は厳密な意味で時間的に区分されるのではなく、それぞれの問題・論争が続いている時期は部分的に重なっている。

第一段階 ソシユールの邦訳と初期受容

まず、ソシユールの講義を「弟子」達が、講義出席者のノートを元に書物としてまとめ、『Cours de linguistique générale』が一九一六年に出版される。この講義録は以上のような経緯を成立事情として有するため、ソシユール自

身の思想をどれだけ正確に伝えているかについて、多くの問題をはらんでいる。というのも、出席者のノートがどれだけ正確に講義を伝えているか、という問題だけでなく、書籍の形式にするために、編者達は講義の前後をいじり、表現を書き加え、素材とした講義ノートに大幅に手を入れているからである。こうした、「ソシユール自身の意図」との関係で言えば問題を含むものであるが、後に、ノート自体やソシユール自身の草稿の研究が一九五〇年代以降、幾つかの段階を経ながら進展するまで、この形態で受容される事になった書物である（また、フランス語原書について、この当時出版された版には——別の言い方をすれば、時枝や小林が参照できた版には——現在入手できる版に含まれているイタリアの研究者De Mauroによる、その後のソシユール研究の進展を反映した、本文の理解を助ける詳細な註が付いていなかったことに注意されたい）。

さて、やがて二〇世紀の言語学に広く、およびその他の人文諸科学にとっても、「構造主義の源流」として非常に大きな影響を与える事になる同書だが、実は最初に翻訳されたのは日本語においてであった。これは、早くも一九二八年に、当初は『言語学原論』という、やや原題とは異なる邦題ではあったが、本稿で扱う小林英夫の

翻訳により、日本に紹介された（ただし、厳密には神保格が一九二二年にはすでに間接的に紹介していたとも言われる。神保（一九二二）、渡辺（二〇一〇）四四―四五頁参照）。そして、この本は、それまで、すでにヨーロッパからソシユール以前の、主にドイツ系の近代言語学を輸入していた日本語を研究する学者達（国語学者達）にも大きな影響を与えることになり、第二段階で問題とされるような、時枝誠記のそうした受容状況への批判を招くことになる。ただし、この段階で、国語学者達により、ソシユール（の邦訳）自体が読まれ、理解されたのか、あるいはむしろ、小林自身の多くのソシユール解説論文と解説書——と見なされたものの、実際には極めてオリジナルな側面も多く含む——例えば『言語学通論』（一九三七）等を介しての理解であったかは、検討されるべき課題である。

第二段階 「時枝論争」

次いで、前田・滝口（一九八五）が「時枝論争」と名付けている段階が来る。

時枝誠記は、一九三〇年代後半から「心的過程としての言語本質観」（一九三七）、「言語に於ける場面の制約について」（一九三八）、「言語に対する二つの立場——主体的立場と観察者の立場——」（一九四〇）といった、どのよう

に言語を分析すべきかを論じた一連の論文を執筆し、ソシュール批判を行いつつ自分の言語論の立場を組み上げていく(すべて時枝(一九七三)に収録)。そうして作り上げられた立場を基に、一九四〇年にヨーロッパ言語学とは異なった日本における言語理論の歴史を振り返る『国語学史』が、そして、一九四一年に言語過程説の立場に基づく具体的な日本語の分析を含む『国語学原論』が出版される。

これらの書物において、時枝は、ヨーロッパ言語学には「言語を『物』として見る傾向」があるのに対し、「日本に古くから見られる考え方は、『事』と『言』を同一視する考え方」であり、「言う事」の根本にあるのは『心』で」という形で日本の言語思想を発掘する(時枝(一九四〇)、一八一―一九頁)。それらを基盤として、「言語の具体的存在」は、「個人の主体的行為以外にない」とし(時枝一九九一―二〇〇七、一五八頁)、ソシュールは、そうした主体において成立している「言語」を主体の外に、「物」として実在するかのようによび間違いを犯してしまつたと言う。そして、これにより言語に関しての「主体的立場」(當事者的な立場)を言語の学から追い出し、単に観察者的な立場によるものへと言語の学を還元してしまつたと批判するのである。

こうした時枝の批判に対し、既に小林から早い時期に批

判があり(小林・波多野・滑川(一九四七))——実はこの批判は以下に触れる服部との論争とある程度同じ内容を含んでいる——、その後さらに様々な論者を巻き込んで一つの論争となる。その中で、本稿の目的に関連して注目しておくべきは、時枝のソシュール「誤読」を具体的に、また決定的に示したことになる、言語学者の服部四郎との間で行われた一九五七年のやりとりである(服部の応答「言語過程説について」「ソシュールのlangueと言語過程説」はすべて服部(一九六〇)に所収。時枝側の応答は「服部四郎教授の『言語過程説について』を読む」として『国語国文』第二六卷第四号)。そこでは、ソシュールの基礎概念である「langage」「langue」「parole」といった語が、日本語の「言語」の両義性(langageとlangueの両方を意味しうる)により、時枝の誤読と、それに基づいたソシュール批判へと繋がっていった様子がソシュールのフランス語原文を引用しつつ分析され、その結果、時枝の批判は、小林の邦訳を通した誤読のせいである、という形に還元される。しかし、こうした論争を通じて、ソシュールの原典に基づく解釈の必要性が再認識されるに至るのである。

第三段階 構造主義の導入とソシュールの原典へ

こうした段階を経て、ソシュール学は、日本語研究・国

語学への直接的な適用可能性よりも、ソシユール自身の理解を深める第三段階へと移る。そこでは、構造主義の高まりを背景として、その源流にあるソシユールへの注目が高まるだけでなく、一九五〇年代から発掘が進んだソシユールの講義録の原資料の直接的研究に基づいた丸山圭三郎の一連の研究により、ソシユール自身の言語理論の理解は新たな段階に入る。

第四段階 ソシユール研究の成熟へ

そしてSuenaga (二〇〇三) の言う第四段階だが、ここでは丸山圭三郎の弟子の世代の研究者達が、一方で、丸山の基礎研究の上に、自らの独自のソシユール読解や、言語哲学を組み立てていく動きがあり、他方で、現地でのさらなる資料の発掘と連動しつつ、ソシユール自身にさらに近い資料を、より正確な形で校訂する作業に従事する研究者も増える。またそれだけでなく、そうした成果が次々と邦訳されてもいる。

とはいえ、ソシユール自身の手稿が新たにまとまって校訂刊行される、それに対するさらなる訂正版が出るといった形での資料の発掘は二〇〇〇年代に入っても続き、ソシユール自身が実際の所、何を考えていたかという点の理解で言えば、まさに世界的に未だ途上の段階という状況な

のである。

Ⅲ 時枝誠記の「誤読」

さて、以上のようなソシユール受容史を簡単に確認した上で、時枝の「誤読」とは何であったのか、幾つかの論点があるのだが、次の一点に絞って本稿では扱っていきう。

時枝は、ソシユール(およびその小林による解釈・解説)の「言語」と「言」(それぞれにすべて「ラング」と「パロール」とフランス語の原語の音写を振り仮名で振ってある)の定義を批判する文脈で次のように言う。

例えば、一匹の馬を表すに何故に、「馬」という「言語」(「ラング」)が使用されるか、又は、「動物」という「言語」(「ラング」)が使用されるかは、「言」(「パロール」)と「言語」(「ラング」)との関係を考える上に重要な問題である(時枝(一九四一―二〇〇七)、九〇頁)。

ソシユールの議論を知っている、あるいは現在のフランス語を良く知っている人間にとっては、何か奇妙な印象を与える文なのではないかと思われる。あるいは、日本語でも、今日の「言語」という言葉の一般的な用法に従えば違和感を覚えるかもしれない。

小林英夫は、ソシユールの邦訳の中で「langage（ランガー・ジュ）」に「言語活動」「langue（ラング）」に「言語」「parole（パロール）」に「言」という訳語を当てている。ここではそれを引き継ぎつつ、原語も振り仮名で示されているのだが、ここでは「馬」や「動物」といった個々の語に対して「言語 langue」という言葉が用いられている。

では、この「言語 langue」は、ソシユールにおいて、どのような意味で使われているのであろうか。ここで重要となるのは、「言語活動 langage」と対比されたその意味である。小林英夫によって「言語活動」と訳されたソシユールの「langage」の解釈について実は問題もあるのだが（ケルナー（一九八二）、二二五―二五三頁、Arrive（二〇〇七）、三八―四一頁）、例えば、『ソシユール小事典』は両者を対比させて、次のようにまとめている。

人間のもつ普遍的な言語能力・抽象能力・カテゴリー化の能力およびその諸活動をランガー・ジュ（langage）とよび、個別言語共同体で用いられている多種多様な国語体をラング（langue）とよんで、この二つを峻別した（丸山（一九八五）、六三頁）。

つまり、ソシユールの文脈では、日本語やフランス語と

いった個別言語（個別の国語）を指し示して使われる言葉である。

しかし、先の時枝の引用においては、そうした個別言語に属している個々の語に対して使われ、これがソシユール批判の要となっているのである。というのも、こうした個々の語——時枝言うところの「言語」——を实体化して扱っているのがソシユールの問題である、と時枝は分析し、そうではなく、それらの語において見られるような、音声の印象（聴覚映像）と意味（概念）の連合は、あくまでも主体（話者）において過程として存在するのであるから、言語の学は、それ（を含む形で／むしろそちら）を分析しなければいけない、と結論するからである。しかし、ソシユールにおける「言語 langue」とは、そうした個々の語を単位として成り立たせ含み持つ体系なのであり、この批判はどのように話が組み合っていない。ここでは、確かに、これは日本語における〈ことば〉を示す語彙の多義性、とりわけ「言語」という言葉では今日明確でないとすれば、それを「言葉」と置き換えれば明確になるような多義性により、ソシユールの「誤読」が起こり、それゆえすれ違いが起こっているように思われる（なお本稿でも「言葉」の多義性を意図的に用いているが、ここでは「語」の意味である）。

実際、小林は、一九四七年の鼎談で、「言語は記憶的事

実であるということ」を時枝は認めない点に問題があると分析した上で、そうした時枝が以上のようなソシユール批判を行う理由を次のように語るのである。

小林 ここで大事なことは、日本語で非常に困るのは、一々の単語も言葉だし、言語も言葉だし、言語活動も言葉だし、それをごっちゃにして、話にならんですよ。それで時枝氏が、言語の本質として聴覚映像と概念のれん合とるようにソツシユールが言ったというのが、ソツシユールはそう言っていないのですよ(小林・波多野・滑川(一九四七)、五頁)。

つまり、時枝は日本語の「言葉」の多義性を「ごっちゃにして」いる所に問題があり、それ故にソシユールを誤読した、そしてそこから時枝の(的外れの)ソシユール批判が出てきた、と言うのである。言うなれば——小林自身がソシユール翻訳の責任者であり当事者ではあるのだが——翻訳の(失敗の)問題とでも言うべきものが起こっていると言うのである。しかし、ここにある問題は、それで片付くものだろうか。

IV 言語学における〈ことば〉

ここで、少しだけ遠回りをしてみたい。フランス語と日本語は、想定される系統的にも、実際の語彙や統語法においても遠い言語である。そうした理由から、もしかしたら、こうした行き違いは、二つの言語が遠く離れているから当たり前の事だという風に考えられるかも知れない。

だが、例えば、日本語とフランス語に比べれば比較的近い、英語とフランス語の間でも、類似の問題は生じている。例えば、今問題にしているソシユールの「[langage]」「[langue]」「[parole]」は英語ではどのように訳されてきたのか、そして、先述述べたようにソシユールの言語学講義には現在De Mauroの詳細な訳が付いており、ここでもこうした問題が触れられているのだが(Saussure(一九一六—一九九五)、註六五、四二〇—四二二頁)、近年のソシユール研究の成果をまとめた『The Cambridge Companion to Saussure』において、編者は様々に提案されてきた英語での翻訳語を検討した後に、「[langue]」には「[language system]」ないしフランス語をそのまま使ひ、「[langue]」を、「[parole]」には「[speech]」ないしフランス語をそのまま使ひ、「[parole]」を、とある種の翻訳不可能性を認めた提案を行う(Sanders(二〇〇四)、一六頁)。だが、何よりもこうした提案の困難さは、編者の言明にも関わらず、様々な

著者の論考が集められた同巻の中で、最終的に翻訳語が統一されていない事にも現われている。つまり、こうした一連のフランス語の語に見合うと考えられる英語の語は、著者により判断が分かれ、一定しておらず、またそうした中で安全策としては、フランス語をそのまま残す、という事になるのである (Amacker (二〇〇五) 参照)。

また、英語からフランス語の場合も同様の問題が生じている。例えば、近年のチョムスキーは「[Language]」という言葉を術語として用いている。これは言語の知というものは、集団的で外的というよりも、個人的で内的なものとして存在しているという事を示す語であるのだが、「langue」と「language」という区別がなく、それらに対し「language」という一語を持つ英語で作られたこの新しい語を、フランス語ではどのように訳しているのか。チョムスキーのある著作の仏訳者は、その序文で、フランス語での置き換え可能性として「[Language (Langue/langage interne)]」と両方を併記する (Chomsky Fr. Fr. (二〇〇五) 二八頁)。別の研究者は翻訳不可能な語として「[Language]」と英語のまま用いる (Rouveret (二〇〇四))。また別の研究者は「[langue]」という語を提案する (Pollock (一九九八))。こうした困難は、英語の「[Language]」という表現が、言語の内的な能力とでも言

うべきもの (Language) と、内的なある言語とでも言うべきもの (Langue) の両者を示しうるだけでなく、また両者を同時に示すという所にチョムスキーの立論が成立しているが故に生じているのである。別の言い方をすれば、チョムスキーの立論は、英語の「[language]」がより普遍的な相である「[langue]」とより個別的な相である「[langue]」の両方を含意する／しうるが故に可能になっているという事を、この翻訳問題は明かしている。

このように、英語とフランス語の間ですら、それぞれの言語において育て上げられてきた言語学の理論は、意外なほど翻訳の困難を抱えており、(初期とは違った形とは言え) 形式化を目指して来た生成文法の用語においてすら、このように基礎的な用語も機械的にフランス語へと訳すことは出来ない。そして、また、こうした翻訳の問題は、一言語の中だけでは明らかにならなかった、そうした理論が形作られ練り上げられる言語に、いかに理論が依存しているかを示しているのである。

V ソシユールを読む小林を読む時枝

さて、このように、言語学において——たとえ現代の生成文法のように一定の形式化を行っているようなもので

あっても——そうした理論の記述を行っている言語の影響は、理論の内実にも影響しかねないものだという事を簡単にだが確認した。

時枝のケースというのも、ある意味でそうした状況の一つを示している。そして、この問題は、時枝が単に勘違いをした、ないしフランス語を正しく理解しなかったというよりも、実の所、一時期の同僚でもあった小林英夫の、ある日本語とフランス語の違いの解釈を、積極的に捉え直し、転倒させる所に成立するものなのである。

小林英夫は、日本におけるソシユール受容の場面でも触れた『言語学通論』という非常に広く読まれた書物において、言語学が何を対象とする学問であるのかを説明しようとする際に、次のように日本語における〈ことば〉をめぐる語彙の問題に触れている(小林(一九三七)、一四一—一七頁)。

言語学はコトバをその対象とする科学である——
これは同語反復であつて定義の体をなさない。要はコトバとは何かを知ることである。

さてこのコトバという日本語は恐ろしく多種多様の意味を含んでいる。いまそのうち幾つかを取り出し、例を以て説明してみよう。

そして、その「多種多様な意味」から、代表的な七つの意味を抜き出し、それぞれ異なったフランス語の語と対応させていくのである。それぞれ興味深い説明が見られるのだが、すべてを引用するには長いため、要点だけをまとめながら見ていきたい(要約しての引用である)。

一. 「鳥獣にもコトバあり」という場合。これは比喩的な表現であり、本来は人間に固有の、思想感情を音声を持って表現する能力である。フランス語の「langage」。

二. 「わが国のコトバ」という場合。いわゆる「国語」のことである。ある一国内部で互いに意思疎通をするための音声手段の規則の体系である。フランス語の「langue」。

三. 「コトバを交わす」という場合。これは各人が持っている言語の能力を、第二の意味の規則の体系としてのコトバを「材料」として行使するものである。フランス語の「parole」。

四 「コトバの上での争い」という場合。これは事実や内容に対比しての表現であり、その表現面に注視した意味である。フランス語の形容詞「verbal」。

五 「コトバ巧みに言い寄る」という場合。第四の意味に近いながら、より技術的な側面が強調されている。雄弁術や修辭学の扱う「コトバ」の領域。フランス語の「discours」。

六 「学問上のコトバ」という場合。明確に定義された概念の表記。フランス語の「terme」。

七 テニヲハまでも含めたコトバ。第二の意味のコトバの要素という意味である。フランス語で「mot」。

このように、小林は、日本語の「コトバ」という言葉 (mot) がいかに多様な意味を持ち得るのかを、それぞれ別のフランス語に対応させる事で示している。小林の分析が興味深いのは、このように七つの異なった意味を抽出した上で、そこにある種の矛盾と止揚の運動を見いだしていく過程である。

まず小林は、第六と第七の意味は、第二の意味でのコト

バの要素に過ぎないとして、ひとまず考察から外す。その上で、第一は最後に扱うとして、第二の意味について、つまり「langue」としての意味について次のように言う。

第2義のコトバは、先に述べた如く、一国民、一民族乃至一社会の歴史的産物即ち文化財であるが、何らかの既製のものという感じがする。いつてみればコトバの静的様相である。

つまり、langueとしてのコトバとは、集団的な産物で、ある種の静的な様相を示すものである、というのである。続いて、第三から第五の意味が分析される（以下、引用文中の傍線は著者自身によるもの）。

第3義は能力の行使であり、第4義は既に行使を予定した上での表現面であり、第5義は特に技術であった。これらは互に些少の差異を含んでいはしても、いずれも第2義には見いだされなかつた活動の概念を共有している。即ち静的様相に対する動的様相であるということが出来る。

そして、この対比は次のように言い換えられるのである。

第2義のコトバが物という感じを与えるとすれば、この動的様相は事という感じを与える。

つまり、第二義 (langue) の意味のコトバは、「物」であり「静的」であるのだが、第三義 (parole) から第五義までのコトバは「事」であり「動的」であるというのだ。だが、そうだとすると次のような問題が生じるだろう。

物と事、静と動——この二つは云う迄もなく矛盾である。日本語のコトバという語はこのように矛盾を含んだ語である。物が正であるならば事は反、事が正であるならば物は反、二者は並びたちえぬものである。

ならば、日本語の「コトバ」は、分裂していて矛盾に貫かれているのか、両立不可能なものを一語で指し示しているのか。

小林は次のように結論する。

然るにここにこの矛盾を止揚するところの概念がある。それが即ち第1義のコトバである。我々は先に一先ずそれを人間の能力だと考えた。しかしこれは不精

密な考えである。それは単なる陰在的な力ではなくして、発現によって知られるところのものである。物を事たらしめる活動——これが人間のなし得ることである。一言にいえば「物を言う事」である。

つまり、日本語の「コトバ」の四つの多義性が示しているコトバの静的な相(第二義)と動的な相(第三から第五義)を総合する、止揚するものとして、第一義のコトバ (langage) があり、これこそ「物を事たらしめる活動」であり、人間に固有の言語能力である、と言うのである。言い換えれば、こうした多種多様な意義を、第一義のコトバ (langage) としてのコトバが統合しているというのだ。

さて、時枝誠記は、この小林の「コトバ」の分析を、ソシュールの解説であると理解して、次のように要約する(小林からの引用箇所まで時枝による。時枝(一九四〇)、一八頁)。

ソシュールは「物をいう事」を言語活動 (langage) と名づけ、「いわれる物」を言語 (langue) と名づけた (小林英夫『言語学通論』事実編第一「言語活動の定義」)

ここには、第三義から第五義が不在となることで、既に

おそらく微妙なズレが生じている。また、ソシユールを批判するために言語活動ではなく言語に注視すること——「たしかに『講義』のソシユールは、言語を言語学の対象だとする——、それはさらにずれてくるのだが、それらを足がかりとして次の結論が導かれる。ソシユールを始めたとした「ヨーロッパ言語学」を批判する、先にソシユールの受容の第二段階「時枝論争」で短く引用した箇所全体を見てみよう。

ヨーロッパ言語学に通じて見られる言語を「物」として見る傾向に対して、日本に古くから見られる考え方は、「事」と「言」とを同一視する考え方である。国語において「事」と「言」とは共に「こと」といわれている。ここに事としての言語ということは、事において使用せられる素材としての言語が存在することを意味するのではなくして、「言う事」の根本にあるものは「心」であって、心が発動して言語となるという意味である（時枝（一九四〇）、一八頁）。

そして、平田篤胤等の日本の伝統的言語の捉え方は

事としての言語の考え方である。国語学史上に現われ

ている言語観は実に右に述べたような「事としての言語」観であって、これは明らかにヨーロッパ言語学における「物」としての言語観に対立するところの思想である（同書、一九頁）。

とされるのである。そして、時枝自身は、こうした「事としての言語」観へと、言語における「主体的立場」を回復することにより向かうのである。

だが、先に見た、小林による日本語とフランス語の比較を通しての「コトバ」と「言語活動」の定義から、この対比と批判までの距離は、ごくわずかではないだろうか。そして実際、この行の直前で、先に見てきた小林の『言語学通論』の該当箇所がソシユールの解説として理解され引用されているのだが、それを基として、この対比と批判が導かれているのではないだろうか。

言い換えれば、時枝によるヨーロッパ言語学批判は、単なるソシユールの誤読として出てきたわけではない。また同時に、ソシユールの読解あるいはフランス語との出会いなくしても可能であったような、日本の古典的著作の読み直しだけから出てきたものでもない。そうではなく、小林によるソシユールを始めとした理論が展開されているフラ

ンス語と日本語との比較を通して示された構図——ただしそこでは日本語は、フランス語に対して混乱したものと示される——を積極的に転倒することによって、産み出されたのである。

それは、小林によってある程度準備されていたとはいえず、そこにおいては単なる日本語の混乱として片付けられてしまっていたものを、積極的に捉え返すことで、日本語において、〈ことば〉をめぐる言葉が、どのように配置されているか、機能しているかを示したのであった。そして、それはまた、ソーシャル的な「Tangage」「langue」「parole」の区分が、もしかしたら、ある種のフランス語の伝統（「ある種の伝統」というのは、この分割は二〇世紀の初頭においては、まだ必ずしも確定的ではなく、ソーシャル自身も原資料を見る限り段階を経て築き上げた区分だからだ）に依拠してのみ可能だったものであり、そうしたフランス語に潜在的に含まれていた要素がフランス語話者に可能にした、ある極めて限定された特殊な区分であったという可能性を知らせるのである（もちろん、類似の対比は、ロマンス諸語に多く見られる——たとえば個別言語について、スペイン語では中世ラテン語の伝統に直接連なる *idiona* e *lingua* 同様使われるといった違いがあるにしても）。

あくまでも言語的普遍が存在するという科学者（言語学者）としての立場を貫き、「言語学一般の対象」ないし「言語学的一般の対象」が存在するという立場を取るのであれば、ソーシャル——たまたまフランス語でその理論を組み上げた——と時枝——たまたま日本語で理論を組み上げた——のどちらかが、より正しく言語学一般の対象を記述しているだろうか、という問題構成へと至ることになるだろう。その場合、時枝はソーシャルの理論を誤読・誤解した、あるいは時枝の側に立ちソーシャルの理論は間違っている、といった結論を出す方向へと導かれる事になるだろう。

しかし、科学史家（言語学史家）、ないし、文化人類学的な視点から、こうしたそれぞれに異なった言語（に対する反省）の伝統を持つ文化において、彼らが日々実践している「言語活動」についてどのような表象を持つに至り、そうした比較的自然に発生する表象だけでなく、文化的衝突を経てどのような（理論的）反省が産まれてくるか、と考えるとき、こうした「ソーシャル」と、それを小林を介して読む時枝は、それぞれ別個の言語の体験を表現しているものとして、そして別個の言語と出会う際の衝撃を体験したのとして現われてくる。そして、時枝が組み上げた日本の伝統に連なると時枝がいう言語の「主体」も

また、そのように読むことで、柄谷（一九八三＝一九九〇＝二〇〇四）、子安（一九九四＝一九九六＝二〇〇三）、安田（一九九八）が指摘するような日本の植民地支配の文脈におけるのとはやや別の文脈で、狭義の「誤読」は異なった、文化の出会いと交差路における出来事として読むことが出来るようになると考えられるのである。それにより、時枝の「ヨーロッパ言語学」批判は、また別の形で「近代の超克」論が現われる文脈とも接続される事となるだろう。

〈参考文献〉

- 池原 悟（二〇〇四）「自然言語処理と言語過程説」、『言語過程説の探求 第一巻 時枝学説の継承と三浦理論の展開』、佐良木昌編、明石書店、三三一―四〇八頁
- 石井久雄（二〇〇七）「昭和前期の国語研究におけるソシユール」、『昭和前期日本語の問題点』（国語論究 第一三集）、加藤正信・松本宙編、明治書院、二五二―二七二頁
- 小川文昭（二〇〇四）「主体的言語学の意義——言語表現の二重性の発見」、『言語過程説の探求 第一巻 時枝学説の継承と三浦理論の展開』、佐良木昌編、明石書店、一五―四八頁
- 柄谷行人（一九八三＝一九九〇＝二〇〇四）「ネーションレス・テートと言語学」、『定本柄谷行人集4 ネーションと美学』、

岩波書店、一七三―二〇七頁

ケルナー、E. F. K.（一九八二）『ソシユールの言語論 その

淵源と展開』山中圭一訳、大修館書店（原著 Ferdinand de Saussure, 1973. Vieweg & Sohn）

小林英夫（一九三七）『言語学通論』

小林英夫、波多野完治、滑川道夫（一九四七）「観念論的国語

観の批判』、『生活学校』（戦後版）Vol.2 No.1. 一九四七年、一月号

子安宣邦（一九九四＝一九九六＝二〇〇三）『日本近代思想批

判 一 国知の成立』、岩波書店（初出『現代思想』二二卷九

号（一九九四年八月）、青土社）

神保格（一九二二）『言語学概論』、岩波書店

立川健二（一九九四＝一九九五）『POUR OU CONTRE SAUSSURE 未来の国語設計者・小林英夫の言語学思想』、

『愛の言語学』、夏目書房、二三九―二七二頁、二八二―

二八六頁（初出『現代思想』第二二卷九号（一九九四年八月）、

青土社）

時枝誠記（一九四〇）『国語学史』、岩波書店

時枝誠記（一九四一＝二〇〇七）『国語学原論』、岩波書店

（二〇〇七年版は、一九四一年版を基にした文庫版である。本稿では二〇〇七年版の頁数で引用する。）

時枝誠記（一九七三）『言語本質論』、岩波書店

中村雄二郎(一九七二・一九九三)「制度としての日本語」
『中村雄二郎著作集Ⅲ言語論』岩波書店(初出『中央公論』
一九七一年)

中村雄二郎(一九八三・一九八七・一九九三)『中村雄二郎著
作集Ⅷ 西田哲学』岩波書店(『西田哲学』(一九八三)、
『西田哲学の脱構築』(一九八七)を一冊にまとめたもの)
仁田義雄・益岡隆志(編)(二〇〇〇)『モダリティ』(日本語
の文法3)、岩波書店

服部四郎(一九六〇)『言語学の方法』岩波書店

前田英樹(二〇〇七)「時枝誠記の言語学」時枝(一九四一)
二〇〇七年文庫版の後書(二七五―三〇九頁)

前田英樹・滝口守信(一九八五)「日本」『ソシユール小事典』

丸山圭三郎編、大修館書店、一五七―一六二頁

益岡隆志(一九九二)『モダリティの文法』くろしお出版

松本克己(一九九二)「主語について」『言語研究』一〇〇号、
一―四一頁

丸山圭三郎(一九八五)「ソシユール理論の基本概念」『ソ
シユール小辞典』丸山圭三郎編、大修館書店、六一―九〇頁
三浦つとむ(一九八三)『言語過程説の展開』(三浦つとむ選
集3)、勁草書房

安田敏郎(一九九八)『植民地のなかの「国語学」』三元社

安田敏郎(二〇〇六)『国語』の近代史 帝国日本と国語学

者たち』中央公論新社

渡辺哲男(二〇一一)『「国語」教育の思想 声と文字の諸相』
勁草書房

Amacker, R. (11005) "Saussure en Grande-Bretagne",

Historiographia Linguistica, XXXII : 3, 325-341.

Chomsky tr. Fr. (11005) *Nouveaux horizons dans l'étude
du langage et de l'esprit*, traduit par Crevier, R. et Kilm, A.
Stock.

Stock.

Johnson, Y. (11003) *Modality and the Japanese Lan-
guage*, Center for Japanese Studies (The University of
Michigan).

Michigan).

Maynard, S. K. (11932) *Discourse Modality. Subjectivity,
Emotion and Voice in the Japanese Language*, John
Benjamins Publishing Company.

Narrog, H. (11009) *Modality in Japanese. The Layered
Structure of the Clause and Hierarchies of Functional Cat-*

egories, John Benjamins Publishing Company.

Narrog, H. (11011) *Modality, Subjectivity, and Semantic
Change. A Cross-Linguistic Perspective*, Oxford University
Press.

Press.

Pollock, J.-Y. (11998) *Langage et cognition – introduc-*

tion au programme minimaliste de la grammaire générale, Presses Universitaires de France (1^e édition 1997).

Rouveret, A. (1100E) "Grammaire formelle et cognition linguistique", in *La linguistique cognitive*, éd. par Fuchs, C., Editions Ophrys / Editions de la Maison des sciences de l'homme, 27-71.

Sanders, C. ed. (1100E) *The Cambridge Companion to Saussure*, Cambridge University Press.

Saussure, F. de (1916 = 1995) *Cours de linguistique générale*, Payot.

Suenaga, A. (110011) "Le Saussurisme au Japon au XX^e siècle", *Cahiers Ferdinand de Saussure*, vol.56, 177-224.

〔筆者追記 本論入稿後、小林英夫と時枝誠記のソシユール受容は、単純に対立するものではなく、それぞれ独自の視点からのソシユールへの批判的応答であったとし、両者を比較分析する渡辺哲男の論考「言語論的転回と言語の教育をめぐる思想——ソシユール言語学の日本への導入と「読む」ことへの教育をめぐる」、『言語と教育をめぐる思想』(森田伸子編、勁草書房、二〇一三年)、二八〇—三三五頁が出版された。その非常に興味深い分析は本論には反映できなかった事を注記しておくたい。〕

日本思想史講座 全五巻

(ぺりかん社、既刊分各巻 税別三八〇〇円)

編集 荻部 直／黒住 真／佐藤 弘夫

／末木文美士／田尻祐一郎

- 1—古代 (二〇一二年)
- 2—中世 (二〇一二年)
- 3—近世 (二〇一二年)
- 4—近代 (近刊)
- 5—方法 (近刊)